

*

ラテンアメリカ文学選集

このページを読む者に 永遠の呪いあれ

*

Manuel Puig

Maldición eterna
a quien lea estas páginas

*



*

マヌエル・プイグ

木村榮一 訳

現代企画室

*

〔訳者紹介〕

木村榮一（きむらえいいち）

1943年大阪に生まれる。

現在、神戸市外国語大学教授。ラテンアメリカ文学専攻。

主な訳書に、コルタサル『遊戯の終り』『秘密の武器』（国書刊行会）、バルガス＝リョサ『緑の家』（新潮社）、カブレラ＝インファンテ『亡き王子のためのハバーナ』（集英社）、フェンテス『聖域』（国書刊行会）、イサベル・アジェンデ『精霊たちの家』（国書刊行会）などがある。



ラテンアメリカ文学選集① 編集・鼓直 木村榮一

このページを読む者に永遠の呪いあれ

発行——一九九〇年一〇月二四日 初版第一刷

一九九二年二月二〇日 初版第二刷

一〇〇〇部

定価——二八八四円（本体二八〇〇円）

著者——マヌエル・ブイグ

訳者——木村榮一

装丁——栗津 潔

発行者——北川フラム

発行所——現代企画室

住所——101 東京都千代田区猿樂町二二一五 興新ビル 302

電話＝03・293・9539・FAX＝03・293・2735

振替——東京二二一六〇一七

印刷——ミツワ印刷

製本——松栄堂製本

0327—901024—1980

©Gendaikikakushitsu Publishers, 1990

Printed in Japan

このページを読む者に永遠の呪

Originally published under the title of
Maldición eterna a quien lea estas páginas

© Manuel Puig: 1980

Editorial Seix Barral, S. A., Barcelona

Japanese translation rights arranged with Manuel Puig, Rio de Janeiro, Brasil
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

Japanese edition © Gendaikikakushitsu Publishers, Tokyo

第一部

*

「これはなんだ？」

「ワシントン広場です、ラミールスさん」

「広場は分かるが、ワシントンが分からないな」

「ワシントンというのはアメリカの初代大統領の名前です」

「なるほど、ありがとう」

「……」

「ワシントンか……」

「気になさることはありません、人の名前ですから」

「この辺の地主の名前かね？」

「いいえ、ちがいます。アメリカの初代大統領の榮譽をたたえるためにつけられた名前です」

「『つけられた名前』と言ったが、どういうことだ？」

「要するにそれだけのことですよ。どうしてそんな目でぼくを見るんです？」

「名前か……」

「ぼくはラリーで、あなたはラミールス、そしてワシントンは広場の名前です。つまり、この広場

の名前がワシントンなんです」

「うむ、よく分かった。ところで、ひとつ訊きたいんだが……ワシントンと言った時に、みんなはどうなふうに感じるんだ？」

「……」

「さきほど、名前など気にすることは無いと言ったが、それならほかに気にすることがあるのかね？」

「人それぞれと言いますから、ぼくとあなたとは違うでしょうね」

「じゃあ、きみにとって本当に気になるものというのとはなんだね？」

「ぼくは自分の哲学を披瀝するために雇われているんじゃないんです。ぼくの仕事はあなたを車いすで散歩させることなんですよ」

「きみは職業紹介所を通して、この仕事をするように言われたんだらう？」

「ええ。車いすで散歩させるように言われてきたんです。ですが、手当ては雀の涙ほどですよ。英語のレッスンでもさせてもらえれば、もっと手当てをもらえるんですが。ニューヨークで暮らすと、なにかと物入りなんです」

「ラリー……君。わたしは英語が分かるんだ。どんな単語でも大丈夫だ。ほかにフランス語やイタリア語も知っている。スペイン語は、自分の母語だから、言うまでもないが、ただ……」

「……」

「わたしは国にいた時、重い病気にかかったことがあるんだ。人間が見たり、触れたりするものは

どんな単語でも分かるんだが、それ以外のものとなるとどうもね。つまり、あるものの中にある、あれはなんだったかな……」

「……頭の中じゃないんですか……」

「いや、ちがう。そのうち思い出すだろう」

「……」

「しかし、単語は分かっているんだ」

「本当ですか？」

「ああ……ワシントン、それに広場。ラリー君は若くて、わたしは年寄り、それも七十四歳という高齢だ。それに木、ベンチ、牧草、セメント、そういうのは分かるんだが、医者から言われた神経衰弱、鬱、躁といった言葉となると、まるで見当がつかない」

「説明してもらわなかったんですか？」

「……」

「訊けばよかったんですよ」

「辞書で調べたんで、意味は分かるんだが、どう考えても自分がそういう病気にかかっているとは思えないんだ。だいたいの意味は分かっているんだが……」

「本当に分かっておられるんですか？」

「うむ……それにしてもうっとうしい天気だな」

「外に出ると、やはり寒いでしょう？」

「いや、大丈夫だ。すまないが、広場の真中まで連れていってくれないか……。昨夜、わたしたちは夢で、あそこ、あの中央に立っている木を見ただろう？」

「ぼくもですか？」

「そうだ。きみとわたし。それにほかの人間もだ。はっきり見えたじゃないか」

「どんな夢でした？」

「昨夜の夢だ」

「どういうことですか？」

「人は毎晩夢を見るだろう。時には二つも三つも見ることもある、ちがうかね？」

「ええ、そうですね」

「昨夜の夢には、これと同じような木が出てきて、一本の枝に実がなっていた。もっとも、実がついていたのは一本の枝だけだったが」

「いいですか、ラミールスさん、たしかに人は眠っている間に夢をみますよ。ですが、見る夢はひとりひとりちがうんです。人はそれぞれ自分だけの夢を見るんですよ」

「じゃあ、きみは昨夜、夢の中で一本の枝にだけ実がなっていたあの木を見なかったのか？」

「ええ、見ていません」

「ほかの人はひとり残らず見ているんだぞ」

「ほかの人も見てませんよ、それを見たのは、あなただけです」

「どうしてだ？」

「どうしてもこうしてもありませんよ。同床異夢って言うじゃないですか」

「もっとゆっくり押してくれないか、車いすが揺れて、気分が悪くなりそうだ。ひどくがたがたするんだ」

「すみません」

「痛みがはじまったよ」

「どこが痛むんです？」

「胸のあたりだ」

「じゃあ、引き返しましょうか？」

「ひどく痛むんだ……」

「だったら、帰りましょう」

「いや、まだ帰りたくない、頼む……」

「面倒なことになると困るんですよ。気分が悪くなったら、引き返しますよ」

「すまんが、そう乱暴に押さないでくれ……もっとゆっくり頼む」

「すみません」

「すみませんでした？ みんなはしょっちゅうそう言うが、どういう意味なんだ？……」

「……」

「どういう意味なんだ？」

「……」

「そんな顔で見ないでくれ……申し訳ないという意味で言っているのは分かるんだが、その言葉を口にする時に、心の中でどう思っているのか知りたいんだ」

「……」

「痛みがひどくなってきた……ラリイ、お願いだ、なにか言ってくれ、通りやむこうの公園にあるものをなにか見せてくれ……そうすれば痛みがおさまるかもしれない……もう我慢できん……」

「こんな寒い日に出かけようとおっしゃるからいけないんですよ。どうしても外に出ると言ってきたかったせいですよ」

「むこうに家が見えるだろう、あそこまで連れて行ってくれ。古い、美しい家だ、ああいうところなら、きっと嫌な顔をせずに迎えてくれるだろう」

「あそこは以前個人の居宅だったんですが、今は大学の事務局になっていて、中には入れないんです。職員が仕事をしたり、昼食代を一般会計に組み込んだりしているんです」

「あの男……あれ、あの男だ……どうして走っているんだ、ひどく苦しそうな顔をしているが、どこか具合でも悪いのか？」

「体を鍛えるために、トレーニングをしているんですよ」

「しかし、あの苦しそうな顔、苦痛に歪んでいるじゃないか、きつとどこか悪いんだ」

「走るのが苦しいからですよ。だけど、健康にいいので、走っているんです」

「しかし、あの顔を見ると、苦しんでいるとしか思えんな」

「そうですね、だけど、あれは体作りのためにやっているんですよ。ああして走ると、その日一日、

元氣いっぱい仕事ができるんです」

「どうしてそんなことが分かるんだ？」

「ぼくも毎朝走っているんです。きつとあんなふうに苦しそうな顔をしているんだと思いますよ」

「女だ……通りを渡っているあの女……」

「どうかしたんですか？」

「彼女のそばに連れて行ってくれ、痛みがひどいんだ、きみには分からんだろうな……それに息が詰まりそうなんだ」

「……」

「あの女性は赤ん坊を連れているだろう？……こんな寒い日に、広場へ連れてくるなんて、非常識にな……」

「そうですね」

「それに犬だ、犬も連れてきている」

「ええ、犬もいます」

「歯がどうかしたのかね、彼女？」

「歯？」

「そばに寄せてくれ、頼む……」

「べつに歯はおかしくありませんよ……子供に笑いかけているだけです」
「笑いかける？」

「ええ。どういふことか分からないんですか？」

「ああ、分からない」

「困ったな……」

「いや、意味は分かっている、ただ、唇を上にあげて、歯を見せるというのがどういふことか理解できないのだ」

「単語の意味をいちいち説明するのは、ひどくくたびれるんです。もう勘弁して下さいよ」

「なんだって？ ああ、痛い、もう我慢できん、頼む……頼むから、尋ねたことに答えてくれ！」

「嬉しいこと？」

「困ったな、どう説明すればいいんだろう？ たとえば、あなたが苦痛を、つまり胸のところの痛みを感じないとしますね、そして木を、夢で見た木を見る……と、その枝に果物がなっていて……見ていると食べたくなり……そばに寄って、もぎとって食べたとしますね、その時はきつと……歯を見せて笑みを浮かべられるはずですよ」

「……」

「分かりましたか？」

「いや、説明が長すぎてよく分からん……だが、痛みのほうは少しやわらいだよ」

「たしかに長すぎましたね。ですが、笑みを浮かべることがどういふことかなんて、気になさることはありません。笑いというのは意味もなく浮かべることもあるんですよ。笑いを浮かべて

いるが、心の中ではなにも考えていないということもあるんです。意味もなくにこにこしているということもありますから。人が笑おうがどうしようが、くそっくらえです」

「そういう言い方はよくないよ」

「ほほえみというのはたいていの場合、うわっ面だけのいいかげんなものですよ、くそっくらえだ」

「一切が混乱していて、なにがなんだか分からないんだ。で、きみにこうして広場の真ん中で連れていってくれと頼んでいるんだが、あそこまで行けばもっと見通しがよくなるだろう。できれば、広場の四角からちょうど等距離のところに身を置きたいんだ」

*

「今日は少ししのぎやすいようだ。この町は天気の変わるのが早いな」
「そうですね」

「……」

「まだ少し時間があるんですが、どここの通りがいいですか？」

「いつもと同じところでもいい」

「ダイヤルをまわされたんですね？」

「ダイヤルって？」

「電話をかけて、手当てを上げるように言って下さったんでしょう？」

「ああ、あのことが、電話をかけたんだが、秘書は帰ってしまって、いなかったんだ」

「じゃあ、またおかけになれば」

「ああ、そうするよ」

「いつもと同じ通りでいいんですね、ラミーレスさん」

「ああ、同じところでもいい」

「ヴィレッジのこのあたりには、ほかにももっと面白いところがあるんですよ」

「このあたりのことをメモにとっているのかね？」

「まさか、そんなことはしませんよ。大学生の時に住んでいたことがあるので、自分の家の庭みtainなものなんです」

「それで？」

「広場のところにある大学に通っていたんです。これでも学士号をもっているんですよ」

「なんの学士号だ？」

「歴史学です」

「だったら、どうしてこんな仕事をしているんだ？」

「まるで尋問ですね。なにかほかの話をしましょう」

「だったら、きみが以前に通っていた大学の話をしてくれないか」

「個人的な話はよろめしょう。スポーツだとか最近のニュースだとか、いくらでも話題はあるでしょう。なんなら地震か本の話でもいいですよ」

「それなら、きみのいちばん好きな本を教えてください」

「そういう質問には答えられませんね。雑多な本を沢山読んできましたから。印象に残っている本だけでも数えきれないほどありますし、それらを比べることなんてできませんよ。そういうことを訊かれても、答えようがないんです」

「じゃあ、きみが家に帰れば、本棚があるだろう。そこにはきつとお氣に入りの本が並んでいるはずだ」